

ベルリン・フンボルト大学名誉教授フォルカー・ゲアハルト氏よりフライブルク大学総長ハンス・シュヴィーアー氏への第一信

## フライブルク大学のハイデガー講座の存続について

2015年3月3日

### 敬愛するシュヴィーアー総長

この数日来、ドイツの複数の有力紙が、フライブルク大学で計画されている哲学科の組織改革について報道しております。聞くところでは、事態の経過は、既にシュトゥットガルトの学術省による審査にまで進んでいます。私としましては、個人的に大臣にご相談するよりも前に、貴下に、哲学関連の計画について今一度ご熟考いただけるよう心よりお願い申し上げます。

この請願を行うことについて、ドイツ国内の、そして諸外国の哲学者から激励の言葉を受けました。皆が恐れているのは、貴下の計画がドイツにおける哲学の営為を損ない、そして、フライブルク・アルベルト＝ルートヴィヒ大学にとって重大な損失をもたらすことです。

貴下の大学と関連学部をこの度の計画に導いたものについて外部から忖度する権利は私にはありません。貴下こそが状況を最もよくご存知のはずですし、また、新聞報道から感じとられるいくつかの徴候について、恐らくは既にさまざまな観点を踏まえたご理解をお持ちのことと思われまふ。また、大学業務に携わったこの四十年の経験に照らして、高い名声を博し、専門家に必要な感受性も備えた学者が互いに争いあうということがどれほど容易に生じうるかも承知しているつもりです。こうした場面において問題点を明らかにし、対立する立場を調停する力を発揮することこそが大学経営の課題であり、そうしてこそ、しばしば避けがたいものである個々人と専門分野における対立を、学問の発展のために生産的なものにすることができるのです。

目下の組織計画で予定されている解決策でもって貴下がこの課題を成功させることはない、私は確信しております。個人の諍いがもはや仲裁不可能なものであっても、それは数年のうちに教員の定年退職によって結局は解決されるものではないでしょうか。そうした見込みを持つ代わりに貴下が下された対応は、見とおすことのできない期間に渡り、哲学科と大学全体の損失になるような仕方、フライブルクにおける哲学の性格を変えてしまうでしょう。私が問題にしているのは、フッサールとハイデガーによって世界的に有名になった教授ポストを放棄してしまうことです。さらに、貴下が、その代替として、国内外の諸大学に十分に存在する研究分野のためのジュニア・プロフェッサーを公募しようとしていることは、当時の講座所有者の刮目に値する業績をあとから否認するような仕打ちと見られるに違いありません。

エドムント・フッサールの著作に関する研究教育については、フライブルクでは、フッサール・アルヒーフが取りはからえます。同じくフッサールに従事するケルン、ルーヴァン、そしてパリの施設との連携において、フライブルクでは、歴史的研究と体系的研究のための人的な繋がりを得ることができま

す。しかし、マルティン・ハイデガーの著作およびその人格と批判的に対決するためには、ここと比較できる研究機関などどこにもありませんし、その目的にとってこれ以上に相応しい場所もありません。

なぜなら、ハイデガーは、挑戦を投げかけるかのように、「田舎(Provinz)」の立場に立つことを公然と決断したからです。この地で、彼は、驚くべき熱意で風景と関わりながら思索し、教育活動にいそしみ、何百人もの熱狂的な学生を惹きつけました。さらに、それらの学生の中の多くの者は、その後の数十年間、二十世紀の哲学に巨大な影響を与えることをなし得ました。そして、間違いなく何人も忘れることがないのは、ハイデガーが、フライブルクにおいて、総長として、また国家社会主義の講師として、取り返しのつかない活動に従事した事実です。しかるに、ハイデガーの大学が今ではもう彼との対決に優先的な関心を持たなくなってしまったとしたら、それは自らの大学への無関心として、また、ドイツ哲学の暗鬱な一章に光を当てる努力の放棄としてしか受けとめられません。

哲学研究における多数の同僚が、貴下の計画変更を請願するように私の後押しをしたのは、誰も私をハイデガーの信奉者だと疑っていないからかもしれません。彼の個々の疑わしい主張だけでなく、彼の思索の中心的な要求についても、これを根拠薄弱なものとして退けることが私にとってはいつでも差し迫った課題でありました。私は『ヒューマニズム書簡』を二十世紀の錯乱した思考における最低のものだと考えていますし、ハイデガーがさらけだした人格的かつ哲学的な極端さは、好意的に受けとめたとしても、取るにたらない馬鹿馬鹿しいものだと思います。また、真剣に判定するならば、これは私の立場とは全く対立するものです。ハイデガーは、過ちに満ちた大学政策と不快極まるほど不親切な振るまいにもかかわらず、高い名声を博していましたが、この才気溢れるフライブルクの同僚に対してカール・ヤスパースが抱いた憤懣は、既に学生時代から私の胸に響いていました。

しかし、そうではあっても、比類のない独創性をもったハイデガーのライフワークに対する讃嘆がある事は事実です。また、幸いなことに、彼の人格の背後にのびるナチの制服の茶色い影に対し、ついにしかるべき注意が喚起されました。そして、世界的な広がりを見せるこの関心を踏まえるならば、まさにハイデガーの批判者にとっても、ハイデガーおよび彼の思索と対決するための特権的な場所が存在することが重要なのです。

間もなく完了する所謂『黒ノート』の公刊が、ハイデガーの人格と著作に対する関心をさらに後押しすることは、容易に予想できます。よりもよって今この時にフライブルク大学がハイデガー講座の教員補充を放棄するとしたら、それは、学問にとって計り知れない損失となりますし、また、フライブルク大学の名声を失わせる結果へと導くでしょう。

フンボルト大学で勤務した二十三年の間、私は、毎日のように、全世界から、とりわけ米国、ヨーロッパの近隣諸国、また東アジアと南アメリカから問い合わせを受けました。これは、学生や若手研究者が、ドイツ哲学の専門的主题に関する彼らの研究を指導・育成するよう依頼してきたものです。こうした状況は私を喜ばせると同時に憂慮も抱かせました。何故なら、既に七十年代から、ドイツの現代哲学は、大変なスピードでもって、自らの歴史の研究をイタリア、フランス、米国、日本、そしてまた中国の諸大学に委託してしまったからです。こうした事情ゆえに、残念ながら極めて少数のケースについてしか推薦をおこなえませんでした。

しかし、ハイデガーへの取り組みが問題となる場合には、なんといってもフライブルクに行くよう指示できました。この点は少なからぬ事例について手助けとなりましたが、問い合わせのほとんどが直接フライブルクに送られていた事も私は確信しています。間もなくこのことが叶わなくなってしまうのであれば、それは貴下の大学にとってだけでなく、フライブルクという都市にとっても損失となります。ドイツにおける哲学の営為については申し上げるまでもありません。

ここにお送りした書簡は、ドイツ哲学会元会長のウォルフラム・ホグレベ（ボン）により提案され、とりわけ、マルクス・ガブリエル（ボン）とイェンス・ハルフヴァッセン（ハイデルベルク）の支持を

受けています。また、この書簡は、国内外の同僚各氏に告知されます。近日中に、このお便りで申し上げた緊急の請願に賛同する者のリストが貴下のお手元に届きます。

貴下がご自分の決定について今一度熟慮なされることを祈念しつつ。

敬具

フォルカー・ゲアハルト